

日本酒原料米を取り巻く状況及び酒造好適米の需要量調査結果の概要

I はじめに

農林水産省では、日本酒の輸出拡大を見据えた日本酒原料米の生産体制を構築し、需要に応じた日本酒原料米の確保について取り組むため、生産及び実需の関係者による「日本酒原料米の安定取引に向けた情報交換会」を開催し、日本酒原料米の取引の現状やその課題を踏まえ、関係者が取り組むべき3つの方策、「複数年契約の拡大」、「作況変動等に対応する仕組みの構築」、「需要情報の提供体制の構築」について取りまとめを行った。

今般、この方策の一環として、全国の酒造メーカーにおける酒造好適米の需要量調査を行い、日本酒原料米の需要に応じた生産に取り組む生産者が作付けを行う上での判断指標となるよう、調査の取りまとめ結果と併せ、日本酒原料米を取り巻く状況等について情報提供を行う。

II 日本酒を取り巻く状況

1 日本酒の出荷状況

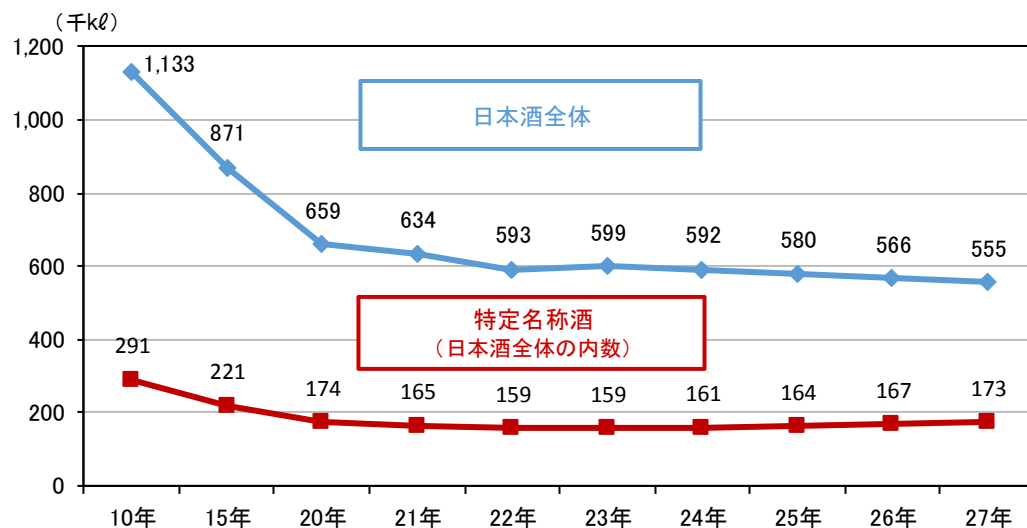
日本酒の国内出荷量は、ピーク時（昭和48年度）には年間1,700千klを超えていたが、他のアルコール飲料との競合等により、長期的に減少傾向にあることから、平成27年度ではピーク時の3分の1以下の555千klまで減少している。

こうした中、平成23年度は東日本大震災の復興需要もあり16年ぶりに国内出荷量が増加し、それ以降、ほぼ横ばいで推移している。近年では、消費者の高級志向を反映して、吟醸酒、純米酒など特定名称酒の出荷量は堅調に推移しており、平成27年度では173千klと日本酒の国内出荷量全体の3割強を占めている。

さらに、日本酒の輸出量は、日本食ブーム等を背景に増加傾向にあり、平成27年度では18千klと、この10年で倍増している。また、政府では、農林水産物・食品の輸出拡大を積極的に推進しており、日本酒についても、関係者と一丸となって取り組んでいることから、今後、さらに日本酒の輸出が拡大すると見込まれている。

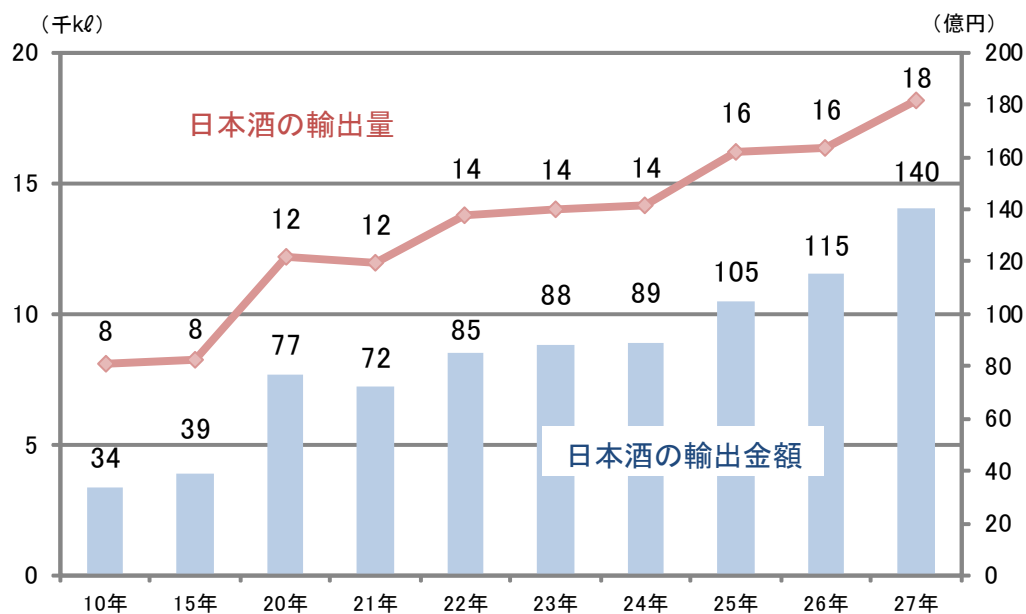
このように、日本酒の輸出が増加傾向にあることや、特定名称酒が堅調に推移していること等から、酒造好適米の需要が高まることが見込まれている。

＜日本酒出荷量の推移＞



資料：日本酒造組合中央会調べ。年は暦年。

＜日本酒の輸出量の推移＞



資料：「貿易統計」(財務省)。年は暦年。

2 日本酒原料米の使用状況

平成26年産における日本酒原料米の使用量は約25万トン程度で、その内訳は、主に特定名称酒の原料や麴米などとして使用される酒造好適米が約9万トン（原料米全体に占める割合は36%）、主にかけ米として使用される加工用米が約11万トン（42%）、主食用米が約3万トン（11%）、特定米穀等が約3万トン（10%）となっている。

特に、酒造好適米については、近年、特定名称酒が堅調に推移していること等から、

酒造好適米の使用比率は、平成10年産の24%から平成26年産においては、36%まで上昇している。

なお、「山田錦」、「五百万石」、「美山錦」などの酒造好適米は、酒造りに適した専用品種であり、味わい深く、香り高い酒が造られる。

<日本酒原料米の使用状況>

(単位:千玄米トン)									
	10年産	15年産	20年産	21年産	22年産	23年産	24年産	25年産	26年産
原料米	405	315	261	246	232	238	241	243	248
酒造好適米	99	75	77	71	65	65	68	76	90
主食用米	165	92	60	54	43	50	57	34	27
加工用米	86	89	74	72	77	71	79	95	105
その他	55	59	50	49	47	52	37	38	26

注1:原料米全体の使用量は国税庁公表値。

注2:内訳は日本酒造組合中央会による推計値。

<参考：酒造好適米の特徴>

- 酒造好適米は、一般の主食用米に比べて粒が大きく、米の中心に「心白」と呼ばれる白く濁った部分を有する。
- 心白は、でんぷんが大きく、でんぷん粒が粗く詰まっていて軟らかい部分で、麹菌の菌糸が中に伸びやすいため、酒造好適米は、強い酵素力を持つ麹をつくりやすい。

Ⅲ 酒造好適米を取り巻く状況及び需給動向

本年7月から9月にかけて、全酒造メーカー1,500社を対象に酒造好適米の需要量調査を実施し、955社から回答（回収率64%）を得た。

また、報告のあった平成27年産酒造好適米の需要量（実績見込）は、87千トンとなり、平成27年産農産物検査数量と比較し、82%のカバー率となっている。

平成28年産においては、平成27年産と比較して約2千トン減少し、85千トンと見込まれている。

平成29年産では平成28年産と比較して約2千トン増加し、87千トンとなり、平成27年産と同水準になると見込まれている。（資料1～3参照）

ただし、平成29年産の作付けに当たっては、今回の需要量調査の結果のみならず、平成27年産の需給状況や平成28年産の生産量等を十分に踏まえた対応を行う必要がある。

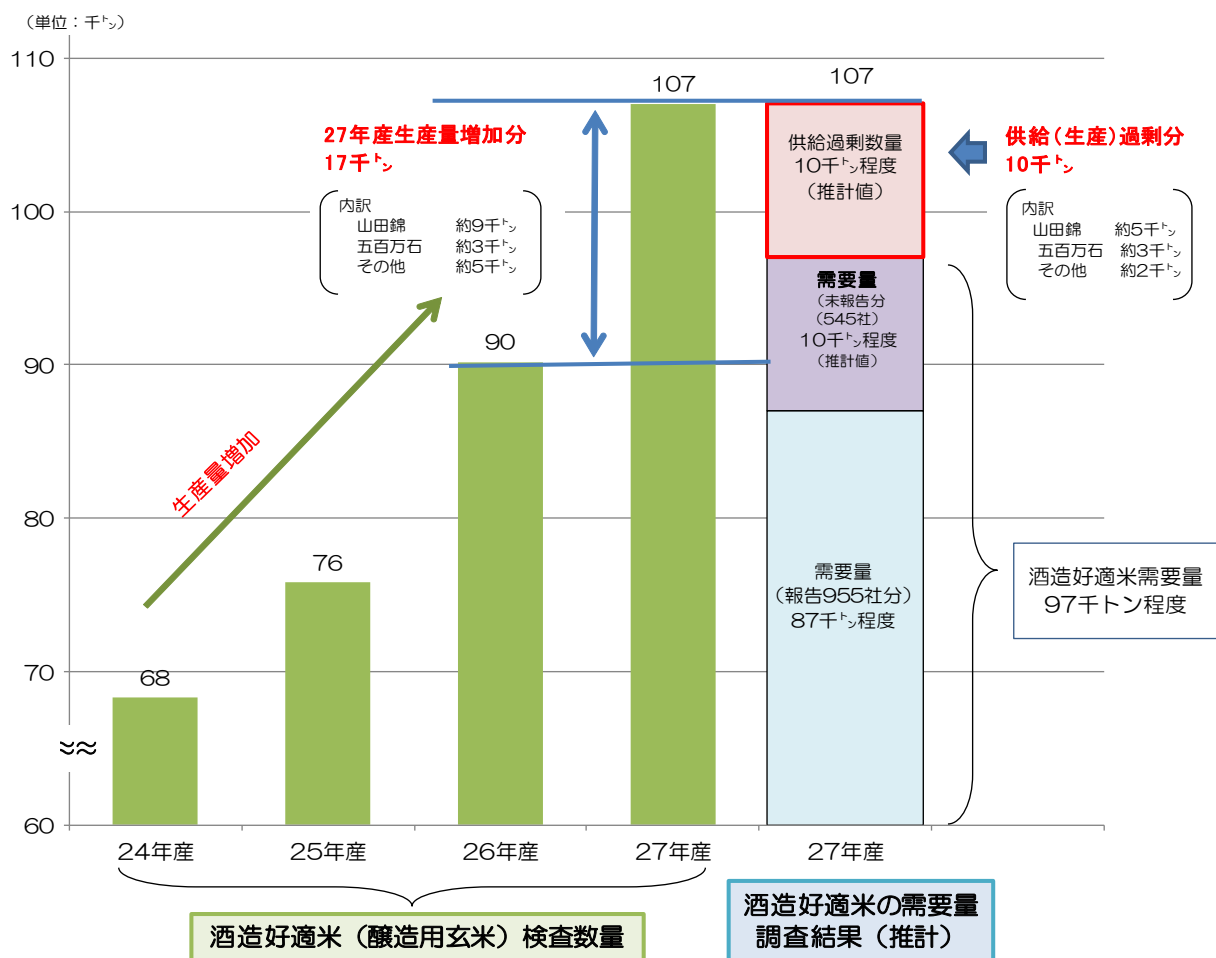
1 現在（平成27年産）の需給状況

平成27年産の生産量は、各産地において、引き続き生産拡大に取り組んだこと及び作柄が良かったこと等から、平成26年産より17千トン多い107千トンへと大幅に増加した。（資料6参照）

このため、関係者からの聞き取りをもとに推計すると、生産増加分のうち約10千トン

程度が生産過剰となっており、銘柄別には、山田錦約5千ト、五百万石約3千ト、その他約2千トが生産過剰と推測される。

酒造好適米（醸造用玄米）の検査数量及び需給状況



<参考：平成22年産から平成26年産までの酒造好適米を取り巻く状況>

1 日本酒の出荷量は長期的に減少傾向で推移していたため、これに合わせて酒造好適米の生産も減らしてきたが、平成22年度以降、出荷量がほぼ横ばいに転じる中で、特定名称酒の出荷量が堅調となったことから、酒造好適米の需要が高まってきた。このため、各産地において生産拡大に取り組んできたが、酒造好適米は、

- ① 栽培が難しく、栽培適地が限られていること
- ② 即時に種子を確保できないこと
- ③ 主食用米の生産数量目標の枠内で生産しなければならないこと

等の制約もあり、需要に即応した生産拡大が困難であることに加え、連続して作柄が悪かったこと等から、酒造メーカーの希望に応じた生産ができず、酒造好適米の供給不足が続いていた。

2 こうした中、農林水産省では酒造好適米の供給不足を解消し、酒造好適米の需要に応じた生産拡大が円滑に行えるよう、平成26年産から酒造メーカーにおける日本酒の生産増に対応した酒造好適米の増産分は、主食用米の生産数量目標の枠外での生産が行えるよう運用改善を行った結果、平成26年産酒造好適米については、運用改善に伴う約4千トの増産が図られたほか、生産量全体

が増加(検査実績ベース90千ト、対前年産比119%)したため、概ね酒造メーカーの希望に見合った供給がなされ、酒造好適米の需給は概ね均衡した状況となっていた。

2 平成28年産の需要見通し

平成27年産の生産量が大幅に増加したことから、酒造メーカーの中には、一部の産地品種銘柄を、当初の購入希望数量以上に購入し、平成28年産の購入数量を減らすケースが見られること等から、平成28年産の需要量(見込)は、平成27年産と比較して約2千ト減少し、85千トとなると見込まれている。

なお、現段階において、平成28年産の大宗の銘柄が収穫されていないため、生産量が把握できないこと等から、平成28年産の需給状況について見通すことは難しい状況にある。

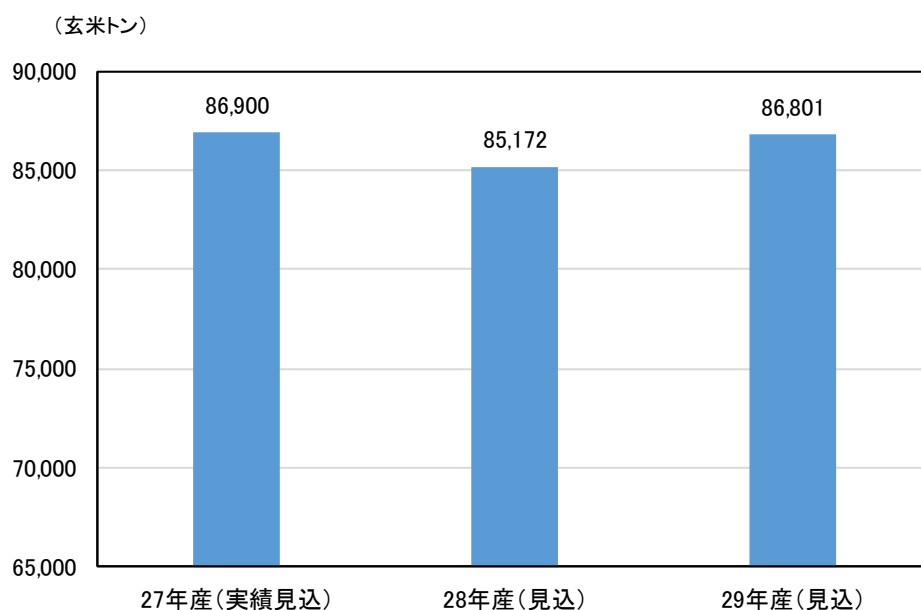
3 平成29年産の需要見通し

平成29年産では、平成28年産と比較して約2千ト増加し87千トとなり、平成27年産米と同水準になると見込まれている。

ただし、平成28年産の生産量が増加し、平成28年産の需要量(見込)を上回ることとなった場合には、持越在庫が生じることから、平成29年産の需要量(見込)が見直される可能性がある。

また、仮に、平成29年産で平成27年産と同程度の作付けを行った場合、平成27年産供給過剰分(約10千ト)や平成28年産の作付状況及び作柄によっては、相当程度の供給過剰が発生し、需給が大幅に緩和する可能性がある。

<平成27～29年産酒造好適米の需要見通し(需要量調査結果)>



4 平成29年産の産地品種銘柄別需要量の見通し(資料4～5参照)

平成29年産の産地品種銘柄別(回答があった193産地品種銘柄)の需要量の見通しについて、平成28年産と比較して、増加が見込まれる産地品種銘柄は94、減少が見込まれる産地品種銘柄は36、変動が見込まれない産地品種銘柄は63となっている。

平成29年産の需要量(見込)は、平成28年産と比較して増加する見込みとなっているものの、その増加量はわずか2,000㌧程度となっている。これを産地品種銘柄別に見ても、最も多く増加が見込まれる兵庫県産山田錦であっても増加量は1,000㌧を下回る状況であり、さらに、これ以外の産地品種銘柄では100㌧を下回る増加量となっている。また、減少が見込まれる新潟県産五百万石であっても減少量は200㌧程度となっている。

なお、平成29年産の需要量が平成28年産と比較して変動する主な産地品種銘柄の状況は以下のとおり。

平成28年産の需要量と比較して増加が見込まれる主な産地品種銘柄

【兵庫県産山田錦】

「山田錦」は兵庫県をはじめ全国33府県で生産され、需要量全体の約4割を占めている。

これまで山田錦を原料とした日本酒は各種品評会等において高い評価を得ており、消費者の知名度が高く、こうした中でも、特に、育種地である兵庫県産山田錦は、

- ① 「グレードアップ兵庫県産山田錦」の取組により、これまで以上に品質が良くなっていること
- ② 山田錦が兵庫県で誕生して今年で80周年を迎え、記念イベントが開催されるなど、注目度が高まっていること

等から、主産地である兵庫県以外の酒造メーカーにおいても需要が高まっており、平成29年産の兵庫県産山田錦の需要量は増加すると見込まれている。

【長野県産美山錦】

「美山錦」は寒冷地での栽培に適しており、長野県をはじめ東北地方を中心に8県で生産され、需要量全体の約1割を占めている。

長野県産美山錦は、長野県の酒造好適米として消費者に広く知られており、県内の酒造メーカーを中心に広く使用されていることから平成29年産の需要量(見込)は増加すると見込まれている。

なお、長野県内の酒造メーカーの中には、商品の差別化を図るため、美山錦から、心白が大きいことが特徴の「ひとごこち」や、幻の米として注目されてきた「金紋錦」などへの切り替えを検討していることから、長野県産美山錦の生産に当たっては、そうした状況を注視する必要がある。

【北海道産吟風】

「吟風」は、北海道の酒造好適米として「きたしずく」、「彗星」と並び北海道内で生産され、主に北海道内の酒造メーカーで使用されている。

北海道における日本酒の原料米は、これまで、本州の酒造好適米が大宗を占めていたが、吟風等の北海道産酒造好適米の品質向上等により、年々北海道産の使用割合が増加しており、近年では他県の酒造メーカーからの引合いも増えていることから、平成29年産の北海道産吟風の需要量（見込）も増加すると見込まれている。

【岩手県産吟ぎんが】

「吟ぎんが」は、岩手県の酒造好適米として「ぎんおとめ」、「結いの香」と並び岩手県内で生産され、岩手県の酒造メーカーを中心に使用されている。

特に、近年は、消費者の高級志向を反映し、製品の特色を持たせた自県産原料を使用した日本酒の製造に力を入れている酒造メーカーや、品質向上を求め普通酒の製造から吟醸酒などの特定名称酒の製造にシフトする酒造メーカー等の動きもあることから、岩手県産米を利用した特定名称酒の需要量が伸びており、29年産の岩手県産吟ぎんがの需要量（見込）も増加すると見込まれている。

【山形県産出羽燦々】

「出羽燦々」は、山形県の酒造好適米として東北で最も多く生産され、山形県内の酒造メーカーを中心に使用されている。

山形県では山形県産日本酒の製造技術・品質の向上と需要振興に向けて、官民・地域が取り組んできており、同県産の日本酒需要量も増加する傾向にあるとの見方から、平成29年産の山形県産出羽燦々の需要量（見込）も増加すると見込まれている。

平成28年産の需要量と比較して減少が見込まれる主な産地品種銘柄

【新潟県産及び富山県産五百万石】

「五百万石」は、新潟県をはじめ北陸地方を中心に全国22府県で生産され、需要量全体の約3割を占めている。

五百万石を原料とした日本酒は、淡麗辛口の味わいで、消費者の一定のニーズがあり、製造工程のうち、特に重要で技術を要する浸漬工程や製麹工程が比較的容易で扱いやすく、日本酒の仕上がりも安定することから、新潟県内の酒造メーカーを中心に広く使用されてきている。

このため、五百万石は吟醸酒、純米酒から普通酒まで幅広い日本酒の原料として使用されているが、平成24～26年産において供給不足であったものの、平成27年産の生産量が大幅に増加したことから、酒造メーカーの中には、当初希望数量以上に購入せざるを得なかったため、平成28年産に引き続き、平成29年産の購入数量を減らして在庫調整を図るケースが見られること等から、平成29年産の需要量は減少すると見込まれている。

【青森県産華吹雪】

「華吹雪」は青森県で育成されたことから、青森県内の酒造メーカーに広く受け入れられ、主に純米酒用原料米として定着している。

また、最近では、大吟醸酒などにも適した「華想い」が育成されている。

酒造メーカーの中には、華想いを使用した商品が好調であるため、華吹雪を減らし、華想いを増やしている酒造メーカーがあること等から、平成29年産の青森県産華吹雪の需要量は減少すると見込まれている。

平成29年産において**需要増加**が見込まれる上位30産地品種銘柄

(単位:玄米トン)

順位	産地品種銘柄		29年産 (見込) ①	29年産と28年産との比較				28年産 (見込) ②	27年産 (実績見込) ③
				29年産と28年産との比較		29年産と27年産との比較			
				①－②	①/②	①－③	①/③		
1	兵 庫	山田錦	24,010	876	104%	731	103%	23,134	23,279
2	長 野	美山錦	3,498	97	103%	-194	95%	3,401	3,693
3	北 海 道	吟風	1,112	96	109%	-35	97%	1,016	1,147
4	岩 手	吟ぎんが	644	61	110%	102	119%	583	542
5	山 形	出羽燦々	1,561	60	104%	-30	98%	1,502	1,591
6	熊 本	華錦	180	47	136%	146	527%	133	34
7	山 梨	夢山水	216	44	126%	84	164%	172	132
8	宮 城	蔵の華	870	35	104%	35	104%	835	835
9	山 口	山田錦	1,330	32	102%	73	106%	1,298	1,257
10	山 梨	ひとごち	188	30	119%	61	149%	158	126
11	福 島	夢の香	469	30	107%	77	120%	439	392
12	新 潟	越淡麗	1,264	26	102%	122	111%	1,237	1,141
13	徳 島	山田錦	715	26	104%	91	114%	689	625
14	長 野	金紋錦	284	26	110%	31	112%	258	252
15	石 川	石川門	130	25	124%	29	129%	105	101
16	秋 田	美山錦	1,498	24	102%	31	102%	1,474	1,467
17	長 野	ひとごち	1,095	24	102%	69	107%	1,072	1,026
18	滋 賀	吟吹雪	307	21	107%	21	107%	286	286
19	山 形	山形酒104号	47	17	155%	37	508%	30	9
20	岡 山	雄町	1,786	16	101%	5	100%	1,770	1,781
21	京 都	祝	400	15	104%	-8	98%	385	408
22	岩 手	ぎんおとめ	372	15	104%	83	129%	357	290
23	秋 田	秋田酒こまち	2,112	15	101%	50	102%	2,097	2,061
24	兵 庫	五百万石	946	14	102%	-270	78%	932	1,216
25	広 島	八反	521	14	103%	-25	95%	507	546
26	岡 山	山田錦	2,204	13	101%	51	102%	2,191	2,154
27	岩 手	結の香	56	12	129%	-5	91%	44	61
28	福 岡	山田錦	844	12	101%	-34	96%	832	878
29	福 井	山田錦	123	12	111%	25	126%	111	98
30	栃 木	山田錦	384	12	103%	25	107%	372	359

平成29年産において需要減少が見込まれる上位30産地品種銘柄

(単位: 玄米トン)

順位	産地品種銘柄		29年産 (見込) ①	29年産と28年産との比較				29年産と27年産との比較	28年産 (見込) ②	27年産 (実績見込) ③
				29年産と28年産との比較		29年産と27年産との比較				
				①－②	①/②	①－③	①/③			
1	新 潟	五百万石	9,493	-199	98%	-1,905	83%	9,692	11,398	
2	富 山	五百万石	2,891	-67	98%	-238	92%	2,957	3,129	
3	青 森	華吹雪	774	-39	95%	-24	97%	813	798	
4	北 海 道	きたしずく	136	-24	85%	-39	78%	160	176	
5	岐 阜	ひだほまれ	860	-15	98%	217	134%	874	642	
6	静 岡	山田錦	454	-11	98%	-0	100%	466	455	
7	石 川	五百万石	1,137	-11	99%	-38	97%	1,148	1,175	
8	熊 本	神力	65	-10	87%	17	134%	75	48	
9	山 梨	吟のさと	12	-9	58%	-4	73%	21	16	
10	和 歌 山	五百万石	15	-8	66%	-3	82%	22	18	
11	新 潟	たかね錦	446	-7	98%	-68	87%	452	514	
12	鳥 取	五百万石	66	-6	91%	2	103%	72	64	
13	秋 田	吟の精	179	-6	97%	-36	83%	185	215	
14	山 形	美山錦	618	-5	99%	-9	99%	623	627	
15	秋 田	改良信交	20	-4	83%	2	113%	24	17	
16	滋 賀	玉栄	297	-4	99%	15	105%	301	282	
17	岐 阜	五百万石	5	-4	55%	-4	52%	8	9	
18	三 重	五百万石	66	-2	96%	4	106%	68	62	
19	栃 木	ひとごち	81	-2	97%	2	102%	83	79	
20	兵 庫	フクノハナ	436	-2	100%	16	104%	438	419	
21	群 馬	若水	27	-2	94%	-2	93%	29	29	
22	静 岡	五百万石	8	-2	82%	-13	40%	10	21	
23	鳥 取	玉栄	92	-1	99%	2	103%	93	90	
24	栃 木	五百万石	168	-1	99%	22	115%	169	146	
25	富 山	雄山錦	203	-1	100%	16	109%	204	187	
26	青 森	華さやか	6	-1	87%	-2	74%	7	8	
27	愛 媛	しずく媛	127	-1	99%	-0	100%	128	127	
28	福 岡	雄町	12	-1	95%	-1	95%	13	13	
29	愛 知	夢吟香	46	-1	99%	14	146%	46	32	
30	香 川	山田錦	23	-1	98%	1	104%	23	22	

IV その他

今回の酒造好適米の需要量調査については、

- ① 平成27年産酒造好適米が平成28年産に持ち越される可能性が高いこと
- ② 平成28年産酒造好適米の生産量を現時点では見通せないこと
- ③ 日本酒の販売状況によっては製造計画が変更となる可能性があること

等の前提条件の下で実施したことから、平成29年産酒造好適米の需要量（見込）は変動する可能性がある。

このため、より酒造メーカーの需要に即した生産に資するため、平成28年11月をめぐりに、当初の需要量調査の報告に変動がある酒造メーカーに対して変更報告を求め、需要量調査の再集計を行った上で、平成29年産の生産計画の策定や種子確保に活用できるよう、来年1月までに改めて情報提供を行う。

V おわりに

酒造好適米の需要量調査については、調査結果の活用状況等を検証するとともに、より産地の求める情報を提供できるよう、調査内容等を適宜見直しながら、今後も引き続き、毎年実施することとしている。（資料7参照）

提供された需要情報を酒造好適米の作付判断の一つの指標として活用することに加え、よりの確に需要に応じた生産に資するよう、酒造好適米の生産者サイドと需要者サイドの結び付きの強化及び安定生産・安定調達が図られるよう、複数年契約の取組の拡大を推進する必要があると考えている。

最後に、日本酒原料米の生産及び実需の関係者がそれぞれの役割を果たし、安定的な取引の拡大が図られることを期待している。